『三四郎』二つのB

Junko Higasa

夏目漱石作『三四郎』の主人公である23歳の小川三四郎は、高等学校を卒業して進学するために東京へ向かう途中の乗換駅で、京都から乗車した見知らぬ女と同じ宿の一室に泊まる羽目になった。女は戦争に行った夫が帰ってこないので、里へ帰る途中である。列車は名古屋止まりなので、その日はそこで一泊しなければならない。女は名古屋が近づくと、一人では心細いから、迷惑でも名古屋に着いたら宿に案内してもらえないかと頻りに頼む。三四郎は躊躇しながらも断る勇気がない。そして宿の慣習的案内で一部屋に通されてしまった。布団は一組しか用意してもらえない。三四郎は仕方なく布団の端を丸めて仕切りを作り、その隣に西洋手拭(タウエル)を敷いて横たわり何とか一夜を乗り切った。そして何事もなく迎えた翌朝、別れ際に女から『あなたは余っ程度胸のない方ですね』と云われるのである。

女と別れた後、列車内で『革鞄を開けて見ると、昨夜(ゆうべ)の西洋手拭(タウエル)が、上の所にぎっしり詰っている。そいつを傍(わき)へ掻き寄せて、底の方から、手に障った奴を何でも構わず引出すと、読んでも解らないベーコンの論文集が出た』『三四郎はベーコンの二十三頁を開いた』『三四郎は二十三頁の前で一応昨夜の御浚(おさらい)をする気である』『女と云うものは、ああ落ち付いて平気でいられるものだろうか。無教育なのだろうか、大胆なのだろうか。それとも無邪気なのだろうか。要するに行ける所まで行ってみなかったから、見当が付かない』『二十三年の弱点が一度に露見した様な心持であった』

さて、この状況を見ていたのは広田先生である。三四郎は東京へ着いてから広田先生に『ハイドリオタフヒア』という書物を借りるが、読んでも判然としない。それがこのベーコンの話とつながる。

哲学者であり神学者でもあるフランシス・ベーコン(Francis Bacon)は、「帰納法」(経験から導く推論―特殊事例から普遍を推し量る)を用い、自然史(記憶)と自然哲学(理性)の対比から研究を進めた。そのベーコンに大いなる影響を受けたのが、ハイドリオタフィア『Hydriotaphia, Urn Burial(骨壺埋葬)』の著者であるサー・トーマス・ブラウン(Sir Thomas Browne)である。彼は医学者として「帰納法」を科学的に促進させた。

ここで二人を併せて考えてみる。ベーコンに「知識は力なり」(羅：Ipsa scientia potential est―英：knowledge is power)という言葉がある。一方でブラウンに『成るがままになるとのみ覚悟せよ』という文がある。三四郎はその両方が解らない。

三四郎は23年間、世間に通用するだけの学問を積んだと思っていた。その学問は東京でも日本でも、大いに活用できると思っていた。しかし現実よりも頭の中の方が無暗に広かった。「囚われ」とは自負であり、思い込みであり、自縛である。三四郎は、「成るがままになる」女に負けて、「知識は力なり」に申し訳ない思いがした。彼の二十三年は演繹法(一般的原理から導く推論)であった。それが見知らぬ女との特殊事例に「頭が上がらない位どやされた」のである。鞄の中で本(学問・理性)を押しつぶしていたのは西洋手拭(タウエル)（生活・本能＝生命体の記憶)である。彼の23年の学問は、「女」という自然と、それに基づく「死生観」を理解する上で毫も役立たなかった。(2014.4.29)